



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



熊本地震 情報を求めて

4月14日午後9時26分、後に「前震」とされた震度7の地震が発生。速報記事が載った熊本日日新聞朝刊が届き、避難者は食い入るように読みふけた＝同15日午前5時ごろ、益城町保健福祉センター

撮影：池田 祐介（熊本日日新聞社御船支局長）

今年度の日本記者クラブ賞は読売新聞東京本社文化部長で『ひみつの王国』評伝 石井桃子（新潮社）を書いた尾崎真理子さんに、また同特別賞はジャーナリストで『原爆供養塔』忘れられた遺骨の70年（文藝春秋）の著者、堀川恵子さんに贈られる。4月27日の理事会で決定した。二人はともに調査報道の優れた成果を刊行し、ジャーナリズムの活性化に貢献したことが高く評価された。

贈賞式は5月25日午後5時30分からプレスセンター10階「アラスカ」で行う。受賞者二人の記念講演会は6月7日午後6時から10階ホールで開かれる。

文芸記者の尾崎さんは著名な作家取材し、貴重な証言を紹介してきた。『ひみつの王国』は『クマのプーさん』の翻訳や『ノンちゃん雲に乗る』で知られる児童文学者、石井桃子の知られなかった内面に初めて光をあてた。女性文学者の生涯を女性記者が丹念に描いた評伝として、ジャーナリズムへの貢献が評価された。文芸記者の受賞は2013年度の小山鉄郎さん（共同通信社）に続き二人目。

堀川さんの『原爆供養塔』は広島島の平和記念公園にある原爆供養塔と呼ばれる塚が舞台。引き取り手のない被爆者の遺骨を守る女性の人生をたどり、さらに遺骨の身元を捜し一人ひとりを追跡して全国を歩いたノンフィクションだ。隠された歴史を地道な取材で掘り起こした取材が評価された。ノンフィクション作家の受賞は初めて。

（中井良則）

クラブ賞 尾崎真理子さん（読売）に
特別賞は堀川恵子さん（ジャーナリスト）
ともに優れた調査報道の成果

クラブゲスト 4・6
浅田次郎、岸博幸、山田健太、西土
彰一郎／村田晃嗣／山岡耕春／木村
玲欧／達増拓也／渡辺将人／春名
幹男／渡邊啓貴／T・ヒッチンズ／伊
藤正直／P・ポロシェンコ／A・グリア
／G・スレーワーゲン／T・ダナ／渡部
正樹、白石和子、長有紀枝／S・レス
コヴァル／中本和洋／H・シュウ／松
岡由季／山口豪／平井久志／松中権

会見レポート
放送法を考える／安保法施行と日本
の防衛 7
南海トラフ地震／達増拓也・岩手県知事 8
ペトロ・ポロシェンコ・ウクライナ大統領
／平井久志・立命館大客員教授 9

記者ゼミ第4期案内／会議報告 10

ワーキングプレス 11・13
熊本地震 熊本日日新聞社 丸野真司
パナマ文書 共同通信社 澤 康臣
シャープ買収 産経新聞社 松岡達郎

被災地通信 震災5年と水害半年 14
茨城新聞社 松下 倫

リレーエッセー 15
田中元首相の地元筆頭秘書 本間
幸一さん 毎日新聞社 丸山昌宏

書いた話書かなかった話 16・17
毎日新聞社襲撃事件 新実慎八

マイBOOKマイPR 18

試写会 19
ふたりの桃源郷 梶本 章
オマールの壁 NHK 出川展恒

日本記者クラブ賞 尾崎真理子さん(読売新聞文化部長)

公益目的事業の1つである日本記
者クラブ賞は「ジャーナリズムの信
用と権威を高めた個人」(クラブ賞規
約)を顕彰する。会員と会員社に属
する記者が対象で、2016年度は
1月末の締め切りまでに8人が推薦
された。候補の氏名は非公開。

推薦委員会(個人D会員8人で構
成)が2月26日、尾崎さんら2人を
有力候補として選考委員会(総務委
員15人で構成)に具申した。選考委
員会は4月6日開かれ、推薦委の結
果を踏まえ議論を重ね、尾崎さん1
人の受賞を理事会に答申した。理事
会は選考委の答申どおり尾崎さんの
クラブ賞を決定した。

推薦委と選考委では「作家が自分
では思いもつかなかったことを巧み
なインタビューで引き出している」

「緻密な取材で石井桃子の新たな真
実を明らかにした」と高く評価され

た。『ひみつの王国』をめぐる評伝
文学とジャーナリズムの違いについ
て「取材対象の実像に迫り、時代を
描く視点はジャーナリズムそのもの
だ」と、直接取材により証言と資料
を集め事実を再構成した調査報道と
評価する声も圧倒的だった。尾崎さ
んは『ひみつの王国』で芸術選奨文
部科学大臣賞と新田次郎文学賞を受
賞した。

贈賞の理由(要旨)

●知らなかった内面に光をあてる

尾崎真理子記者(56)は文芸記者
として、作家本人も気づかないよう
な証言を引き出してきた。特に、児
童文学者石井桃子を息長く取材した
『ひみつの王国』評伝「石井桃子」
は戦前、戦中、戦後を通して書くこ
とにこだわった女性文学者を描きき

り、女性記者による出色の評伝とし
てジャーナリズムにインパクトを与
えたことが、高く評価された。

晩年の石井桃子本人にインタビュ
ーを何回も続けただけでなく、知人
を訪ね、石井の膨大な手紙を入手し、
関連書を広く集め、証言と資料を積
み重ねて実像に迫った。誰も知らな
かった内面に光をあて、時代を切り
取り、読者に分かりやすく提示した
作品であり、ジャーナリズムの成熟
に貢献した。

地方支局に配属されたり育児休業
を取った女性記者の最初の世代の一
人であり、その活躍は若い女性記者
にとっても刺激となっている。

特別賞

堀川恵子さん(ジャーナリスト)

特別賞はクラブの会員や会員社に
属するものの以外を対象とし、個人で
も取材チームでも受賞できる。今年
度は7件の推薦があった。推薦委は
堀川さん1人を有力候補に絞り、全
員一致で選考委に推薦した。選考委
も堀川さんを理事会に答申し、理事
会は正式決定した。

推薦委と選考委の議論では『原爆
供養塔』について「粘り強い記者魂、
幅の広い取材力、圧倒的な筆力とど
れをとっても強烈なインパクトがあ
る」地道な取材で隠れた歴史を明る

みに出すジャーナリストの意義を内
外に示す仕事だ」と強い支持が集ま
った。「広島島の原爆報道は毎年、わ
れわれも続けているが、この原爆供
養塔については書ききれないなかつ

た。見事にしてやられた」と反省も
出た。「この特別賞が、調査報道に
長く取り組む記者を各社が増やして
いくきっかけになればいい」と調査
報道の態勢強化を期待する声もあつ
た。堀川さんは広島テレビの放送記
者を辞めてフリーとなり、傑作ノン
フィクションを次々に発表してい
る。『原爆供養塔』で今年の大宅壮
一ノンフィクション賞も受賞した。

贈賞の理由(要旨)

●地道な取材と圧倒的筆力

堀川恵子さん(46)の『原爆供養塔』
忘れられた遺骨の70年』は、一般に
知られていない被爆者の遺骨を納め
た原爆供養塔を取り上げ、原爆投下
70年の節目の年に核兵器の非人道性
を新たな角度から浮き彫りにした。
関連文書の発掘から全国各地の関係
者を訪ねてのインタビューまで、労
力を惜しまない徹底した取材が高く
評価された。

堀川さんは、『死刑の基準』―永
山裁判が遺したもの』『チンチン電
車と女学生』などのノンフィクショ
ン作品でも実績を残している。

同じ新聞社にいても、文芸記者がどんな仕事をしているのか、他部の記者はよくわかっていない。たくさんさんの本に囲まれ、文壇バーになるところに通う古いイメージがまだ残っているのではないだろうか。

「競争しますよ」と一線記者の自負がある。どの作家をとりあげ、どのように記事で書くか。「自分の直感でくちを打つところがある。鼻が利く人ではないと、長くやつてられません」

作家という数居の高そうなプロとつきあい、読者への媒介役を果たさなければならぬ。「作家が考えていることを正確に伝える。時代を超えて表現したいことを虚心坦懐に聞く。作家本人も気がついていない面を書けるか。真剣勝負です」。虚心坦懐に、を繰り返した。

作家に本音を語らせる秘訣は？「予習、です。作品を全部読む。発言も集める。その上でゼロに戻して、質問を組み立てる。実際にはとても順序立てては聞けません」。録音しますか？「テープは取ります」。



「小学生のころ、本屋はツケで買えました」
(読売新聞文化部長席で)

尾崎真理子さん 作家の本心 虚心坦懐に伝える

語尾まで全文、自分で起こしますね」1994年から20年がかりで取り組んだ児童文学者、石井桃子。本人へのインタビューを積み重ねる。書き残した手紙を入手する。知る人を探し、訪ねる。関連した本を読みこむ。『ひみつ王国 評伝 石井桃子』は、「ここまで調べるのか」と読者をうならせる丹念な作品だ。「8割がたは取材です。感覚だけでは書けない。証拠や資料を集め、決めつけないことを心がけました」

信頼関係を築いた作家とは、その日の記事にならなくとも、繰り返し会って話を聞く。二人しか知らない話がたま

つていく。「自分の中で留めておくのはもったいない。書き残さないと埋もれてしまう。それもジャーナリズムの大事な機能じゃないですか。奮起しないと」文芸記者という新聞が生み出した専門職。

文学を手掛かりに時代の変化と変わらざる深層を取材する。その先頭を走ってきた女性記者の意地が仕事を支える。
(中井良則)

「ウチも毎年、原爆報道をやってきたのに：完敗だな」。ある選考委員が、堀川さんの著作『原爆供養塔』について語った賛辞だ。

広島・平和記念公園の原爆慰霊碑は有名だが、同じ公園の原爆供養塔はほとんど知られていない。ここには引き取り手のない多数の遺骨が眠る。堀川さんは、関連文書や関係者を取材し、



「テレビの現場で頑張る人たちの活躍の場がどんどん狭くなっていて悔しい」
(文藝春秋の資料室で)

始した。それから10年余。永山則夫など死刑をテーマにした著作で高い評価を受けてきた。「フリーになり、放送枠や締め切りから解放された。覚悟をもってやりたい取材をやっていた」と原爆について完結したという気持ちはゼロ。今日もご遺族から電話があった。取材した人たちから「死ぬまでやれ」と課された気がする。でもストレスはない。私にとつて取材して書くことは生きることの一部だから」

供養塔の死者をめぐる数々のドラマを掘り起こした。無駄足も含め愚直なまでの徹底した取材ぶりは、昨夏の当クラブの会見でご本人が明らかにしている。ぜひHPで検索して会見動画を見ていただきたい。同書は大宅壮一ノンフィクション賞にも決定。「盆と正月が一緒に来たようです」と喜ぶ。

広島テレビ時代は記者もディレクターもやった。30半ばでデスクに抜擢されたが、「取材できなければ会社にいる意味がない」と悩んだ末に退社して上京。テレビ各局に番組の企画を売り込んで生計を立て、長年やりたかった司法関連の取材を開

堀川恵子さん 取材者の覚悟 愚直に真摯に

まっすぐこちらに視線を向け、取材者の「覚悟」を語ってくれた。重い過去を抱えた関係者に「この人なら話そう」と信頼されるのは、この真摯さゆえだろう。

自分でテーマを選び、全精力を傾け取材し記事を書く。ジャーナリストならだれもが願う、ほとんどが途中で挫折する道だ。でもこの人はこの難路から外れず、着実に歩を進めている。会見時、クラブに残した揮毫は、「取材するのみ」の一語だった。

(土生修一)

わたなべ まさひと
渡辺 将人 北海道大学大学院准教授



ヒラリー・クリントンの上院議員選対でも働き、選挙の現場を肌で知る研究者。ヒラリーの弱みを「選挙運動の柱となる政策がない」と言う。トランプは共和党主流派が「党内に閉じ込め、甘やかした」。選挙だから見えるアメリカの個別と全体を詳しく論じた。

■ 4・4(月) シリーズ企画「変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選」④／司会：杉田弘毅委員／出席：59人

はるな みきお
春名 幹男 早稲田大学大学院客員教授



米外交機密文書を分析した『仮面の日米同盟』(文春新書)で日米同盟の「疲労」を憂えた。「推薦したい本は野坂昭如の『アメリカひじき』と始まり、日米ガイドラインの「作画的翻訳」を批判。「ナイスガイが当選する」とヒラリー苦戦の可能性にも言及した。

■ 4・18(月) シリーズ企画「変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選」⑤／司会：杉田弘毅委員／出席：62人

わたなべ ひろたか
渡邊 啓貴 東京外国語大学教授



新シリーズ「揺らぐ欧州」。ギリシャ財政赤字、ウクライナ、難民、移民、テロと難局が立て続けに襲う。「これまでも危機が起こるとヨーロッパという共通理念に求心力が働く」。今後も欧州統合の旗は降ろせない。「日本人は移民を分かっているか」と疑問も。

■ 4・14(木) シリーズ企画「揺らぐ欧州」①／司会：杉田弘毅委員／出席：72人

ティム・ヒッチنز 駐日イギリス大使



冒頭のスピーチは得意の日本語で行った。6月予定のEU離脱をめぐる国民投票について、「移民が多い地域ほど離脱賛成が多く、若い世代は3分の2が残留支持」「離脱すれば、英国だけでなく英国に進出している日系企業にもダメージを与える」と述べた。

■ 4・4(月) 記者会見／司会：福本容子委員／通訳：池田薫／出席：78人

いとう まさなお
伊藤 正直 東京大学大学院名誉教授、大妻女子大学教授



金融政策の観点からマイナス金利を解説。「危機は再び来る。出口戦略を早く考えなければ」と警鐘を鳴らす。「経済成長率アップより、経済成長1%でも安心できる社会をめざすように政策目標を切り替えるべき」と発想の転換も訴えた。

■ 4・6(水) 研究会「どうみるマイナス金利」②／司会：軽部謙介委員／出席：86人

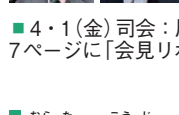
討論会「放送法を考える」※写真左上から時計回りに



あさだ しろう 作家
浅田 次郎 日本ペンクラブ会長



きし ひろゆき 慶応大学教授
岸 博幸 (メディア学、元経産省)



やまだ けんた 専修大学教授(言論法)
山田 健太 日本ペンクラブ常務理事



にしお しょういちろう 成城大学教授(憲法)
西土 彰一郎

■ 4・1(金) 司会：川村晃司委員／出席：128人
7ページに「会見レポート」

むらた こうじ
村田 晃嗣 同志社大学教授



3月まで学長だったのに、あるいはそのせいか、大学人の憂鬱が次から次へ。「日本の教授の8割は安保法制に反対だった。大学人は疲弊し、不満のはけ口が安保法に向かったのだろう」「大学教員は立場の違う人と交わらなくても生きていける」。不寛容を嘆いた。

■ 4・5(火) 研究会「安保法施行と日本の防衛」④／司会：恵村順一郎委員／出席：40人

やまおか こうしゅん
山岡 耕春 名古屋大学大学院教授



「宿命の巨大地震」—今後30年間で発生確率60～70%の南海トラフ地震をそう呼んだ。東日本大震災は被災者1千万人を1億人が助けた。南海トラフ地震は、より広域に及ぶため被災者3500万人を7500万人が助ける構図になるという。規模の大きさに身がすくむ。

■ 4・8(金) 研究会「南海トラフ地震」①／司会：服部尚委員／出席：50人

きむら れお
木村 玲欧 兵庫県立大学准教授



防災教育の在り方について、「人に届く」言葉を駆使しながら、思いを込めて語った。「防災の原点は自分が死なないこと」「人間はリスク情報を素直に受け取らない」「マニュアルは作るためにあるのではなく、使うためにある」。うなずきながら聞いた。

■ 4・8(金) 研究会「南海トラフ地震」②／司会：服部尚委員／出席：41人

たつぞう たくや
達増 拓也 岩手県知事



水産加工業の回復もあり、陸前高田など沿岸地域で若者の地元志向が高まり高校生の地元就職率が上昇しているという。「被災自治体の自立」を促す国の姿勢には「自立と復興への思いを持ち続けてきたわれわれに、国から今さら自立と言われても…」と違和感を示した。

■ 4・13(水) シリーズ企画「3.11から5年」⑦／司会：山崎登委員／出席：48人

シモナ・レスコヴァル 駐日スロベニア大使



「閣僚と国会議員の半数、憲法裁判所判事の過半数が女性」と、男女平等の“先進国”であることを強調。また「EU拡大を基本的に支持している。(かつて敵対した)セルビアも含め、欧州の一部ならどの国でもEUに入る資格がある」とした。

■ 4・19(火) 記者会見／司会：土生修一事務局長／通訳：西村好美／出席：20人

中本 和洋 日本弁護士連合会会長



多額の訴訟費用や煩雑な手続きなど現状の課題を並べ、「欧州では弁護士費用を保険でカバーし、韓国では裁判資料の電子化が進んでいる。民事司法改革をやるために会長になった」と熱く語った。「戦争は最大の人権侵害。安保法制には反対する」

■ 4・21(木) 昼食会／司会：瀬口晴義委員／出席：33人

ハオリヤン・シュウ 国連事務次長補、国連開発計画(UNDP)アジア太平洋局長



「持続可能な開発」「民主的ガバナンスと平和構築」「気候変動対策と強靱な社会の構築」がUNDPの重点活動。その具体例として、ミャンマー・ラカイン州での民族対立、太平洋諸島での気候変動への対応を紹介した。揮毫は中英両語で「努力は報われる」。

■ 4・22(金) 記者会見／司会：石川洋企画担当部長／通訳：大野理恵／出席：26人

松岡 由季 国連国際防災戦略事務局(UNISDR) 駐日事務所代表



災害リスク減少をめざし、「仙台防災枠組」など国際的提言を行っている国連組織の日本代表。「貧しい国は防災のゆとりがないと訴えるが、防災こそ貧困軽減に有効」「防災分野で、日本は『自助、公助、共助』の意識が高く、国際的にリスペクトされている」

■ 4・22(金) シリーズ企画「国連と日本人」⑦／司会：小栗泉委員／出席：29人

山口 豪 日産自動車副社長



2020年に一般道路で自動運転の車を走らせる。夢の新技術を知ると、人間の出番はないのか、と心配も。「ハンドルは残すし、運転も楽しめる。自動運転モードに切り替えれば、充実した移動時間を楽しめます」。死亡事故ゼロへの挑戦という夢は実現してほしい。

■ 4・25(月) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」④／司会：安井孝之委員／出席：80人

ペトロ・ポロシェンコ ウクライナ大統領



偶然、パナマ文書疑惑で自身の名前が報じられた直後の会見となり、外国プレスを含む約200人が出席した。疑惑には「隠すことは何もない」と潔白を主張。また日本の対口外交には「日本を全面的に信頼している」と述べ、「過度の親口」に傾かないよう牽制した。

■ 4・6(水) 記者会見／司会：脇祐三委員／通訳：池田薫、渡辺奈緒子／出席：197人

アンヘル・グリア OECD事務総長



パナマ文書疑惑が広がる中、発言が注目された。OECDの提唱で各国当局間による税務情報交換が来年から始まる。「これは革命そのもの。パナマも孤立しては行かない」。日本の消費税アップには「すでに明言しており、市場も予想している」と実施を促した。

■ 4・11(月) 記者会見／司会：実哲也委員／通訳：池田薫、大野理恵／出席：139人

ギュンテル・スレーワーゲン 駐日ベルギー大使



「われわれの生活様式は変えない。変えようとくろむ相手の意図に乗せられてはいけない」。ブリュッセル連続テロ事件から3週間、北部はオランダ語圏、南部はフランス語圏、移民社会・多様な構造こそがベルギーの魅力の源にある、と力説した。

■ 4・11(月) 記者会見／司会：石川洋企画担当部長／通訳：池田薫／出席：129人

ティエリー・ダナ 駐日フランス大使



G7サミットを控え現役記者から7つの質問。中でもオランダ仏大統領の広島訪問を聞かれ「日本政府の招待はない。一人で行くのがいいのか。全ての首脳に問うべきだし、最初に答えを出すのは米国だ。仏国内に反対意見はない」と意味が深い返事。

■ 4・15(金) 記者会見／司会：坂東賢治委員／通訳：三宅薫子／出席：52人

※写真右から
渡部 正樹 国連人道問題調整事務所(OCHA)神戸事務所長
白石 和子 外務省女性・人権人道担当大使
長 有紀枝 認定NPO法人ジャパン・プラットフォーム理事



初の「世界人道サミット」が5月末、トルコで開かれる。国連、日本政府、民間NGO代表が取り組みを話した。4月14日に起きた熊本地震の支援活動についても急ぎよ報告があった。

■ 4・18(月) 記者会見／司会：宮田一雄委員／出席：61人

● ベルギーの夕べ



が行われた。

大使館から6種類のビールが提供された。そのうちの1つは、日本・ベルギー友好150年を記念して発売された「シェフ・ソレイユ150」。晴れた日に「太陽(ソレイユ)」のビールで乾杯しようという意味が込められたという。

10%以上の高いアルコール度数で知られるベルギービールだが、今回の最高は6%。飲んだ後の試写会を配慮した、と担当者が教えてくれた。

映画「神様メール」は、ブリュッセルに住む“神様”の娘から「余命通知」メールが全世界に送られ、パニックが起きる。その娘が新たに6人の使徒を探す旅に出て、人間の悩みを解いていくというストーリー。遊び心に溢れ、それが映像にマッチした作品だった。

(石川 洋)

【4・11 10階ホール／日本・ベルギー友好150年記念】

スレーワーゲン・ベルギー大使の会見(5分)に続き、お楽しみの「ベルギービール試飲会」と「神様メール」の試写会

● ひら井 ひさし 立命館大学客員教授



共同通信記者時代から北朝鮮専門家として定評がある。「36年ぶりの党大会は末端からの世代交代を促す目的がある」「金正恩は思考過程自体が不明。まともな外国人が彼の話聞いてあげただけでも意味がある。外交分野でアドバイスする側近がいないのが不安」

■ 4・26(火) 研究会「金正恩体制をどうみるかー労働党大会を前に」／司会：山本勇二委員／出席：86人

● まつなか ごん 松中 権 認定NPO法人グッド・エイジング・エールズ代表



「LGBTの比率は左利きとほぼ同じだが、『見えないマイノリティー』。カミングアウトはまだ困難で今は過渡期」「携帯電話、マイレージなどで同性パートナーを家族割の対象にする動きも」。多様で複雑な性のあり方を現役広告マンらしく、分かりやすく説明した。

■ 4・28(木) 研究会「LGBTと社会」／司会：宮田一雄委員／出席：18人

会見余話

● ゲストルームで叙勲セレモニー

ウクライナのポロシェンコ大統領の会見直前、貴賓室でウクライナ文学翻訳者の藤井悦子さんに大統領からオリガ公妃勲章が授与された。

この勲章は、ウクライナの実業家や文化振興に貢献した内外の女性を対象にしたもので、藤井さんが日本人として2人目の受章者。ウクライナ語文学の始祖といわれる、19世紀の画家・詩人のタラス・シェフチェンコの詩集の和訳が評価された。

藤井さんは、独学でウクライナ語を習得し、シェフチェンコの作品をロシア語からではなく、ウクライナ語から翻訳した初の日本人だという。「現代ウクライナ短編集」(群像社ライブラリー)などの訳業がある。

大統領は会見の冒頭で、藤井さんの功績に言及し、会場にいる藤井さんを紹介し拍手がおきた。貴賓室で、叙勲授与が行われたのは初めてだと思う。

(事務局 石川)

● 「型破りのキャラ」で民事司法改革に熱弁

4月に就任したばかりの日弁連の中本和洋会長は、ゲストブックの肩書に「日本弁護士会：」と書きかけて同行者から「会長！ 弁護士連合会ですよ！」と指摘され、「会長が間違ったらあかん」と苦笑し、「会」を斜線で消し「連合会」と続けた。

京大工学部、大学院卒で民間企業の研究所

へ。「義理の父親から『弁護士はおもしろいぞ』と酒飲みながら何度も言われて弁護士になった」今や、弁護士になりたいと言ったら、

「リスクが高くて、やめとけ」と言われる。なんとかせにゃならん。持論の民事司法改革になると一段と熱が入った。「訴訟費用の援助、国際弁護士の養成：日本の民事司法は国際標準になっていない！」。だんだん身ぶりが大きくなり、出身地・広島弁の「香り」が強くなってくる。

あの熱弁を紙上で再現できる筆力は私にはない。ぜひ会見動画で堪能してください。

● 今、求められる「レジリエント」

「Be resilient (レジリエントたれ)」

UNISDR駐日事務所代表の松岡由季さんの揮毫だ。

「レジリエントは『強靱』と訳されますが、これはハードなイメージで違和感があります。曲げられても元に戻るしなやかな強さが本来の意味。災害復興にも重要な言葉です」若々しく元気にみえる松岡さんだが、実は昨年、健康を害して入院、地道なりハビリでようやく職場復帰したという。「病気になるって、私自身もレジリエントでありたいと思っています」

辞書を引くと、「回復力」「抵抗力」「復元力」「耐久力」「防炎力」と幅広い訳語が並んでいた。舌を噛みそうだが、「レジリエント」を苦難に負けないオマジナイにしたい。

(事務局 土生)

討論会

「放送法を考える」

放送法第4条は局と視聴者の間の約束



「放送局が政治的公平性を欠く報道を繰り返した場合、電波法に基づき電波停止を求める可能性がある」という高市早苗総務相の発言が、波紋を広げている。放送法をめぐる論議が活発化する中、「放送法を考える」と題して4月1日に開催された討論会は時宜にかなっていた。

大きなポイント

政治的公平性や多角的な論点の提示など4点を定めた第4条の「番組編集準則」をどう位置づけるかだ。高市総務相は「法規範性を有する」と解釈し、行政指導や行政処分の根拠としている。

経産省出身の岸博幸・慶応大教授（メディア学）は「倫理規範であり、法規範と考えるのはおかしい」と批

判した。西土彰一郎・成城大教授（憲法）も「両論併記より、社会の中ですくい上げられない声を拾うのが番組編集準則。制作者はこれを盾に政治の介入を退けられる」と述べた。「法規範」論者は皆無だったので、議論はそれ以上深まらなかった。

もっとも、「第4条は、放送局と視聴者との間の約束」という山田健太・専修大教授（言論法）の表現は腑に落ちた。「停波」発言の背景には、行政の権限拡大と市民のメディア不信がある。メディア戦略にたけた安倍首相がそれを後押ししている」との見方にも説得力があった。

作家の浅田次郎・日本ペンクラブ会長は、政治家の「愚民思想」を指摘した。論議は、放送を所管する独立行政委員会の必要性や放送倫理・番組向上機構（BPO）の役割、放送現場の「萎縮や忖度」にも及んだ。

第4条については「放送法遵守を求める視聴者の会」が一部の新聞に大きな意見広告を出し、特定の番組を指弾した。啞然とさせられたのは、この賛同者に名を連ねた岸教授が「名前を貸しただけ」と発言したことで。 「BPOの委員にはジャーナリストがいけない」という別のパネリストの事実誤認も気になった。

読売新聞出身 鈴木 嘉一

研究会

「安保法施行と日本の防衛」

議論するほどに問題点噴出

安保法制施行（3月29日）に伴い、4人の識者（賛成2、反対2）に別個に問題点を議論してもらった。

賛成派は小野寺五典・元防衛相（3・28）と村田晃嗣・同志社大教授（4・5）。小野寺氏は集団的自衛権行使容認閣議決定時の担当相。中国艦船の領海侵犯や北朝鮮の核・ミサイル実験にどう対処したか、との自らの体験に触れ、従来法制の抜け穴を埋め日米連携を強化するためにはどうしても新法制が必要だったと強調した。

村田氏は、法制がなぜ世論や知識人に受け入れられなかったかとの観点から分析、①憲法学者による違憲論議が先行し、安保学者による抑止力強化議論との間で十分な相互作用がなかった②11法案を一括審議するなどプロセスに周到性が欠如③大学教員の8割が反対した背景には一連の大学改革に対する反発があった——との見立てを披露、他者に耳を傾ける「寛容」の精神が重要とした。

反対派は山崎拓・元自民党幹事長（3・29）、柳澤協二・元内閣官房副

長官補（3・31）の顔ぶれ。

山崎氏は新法制の最大の問題は集団的自衛権容認より、むしろ後方支援（兵たん業務）を武器弾薬、ワールドワイドに広げた部分にあり、必ずや兵たん部門が狙われ死傷者が出るに指摘した。また、中国台頭には個別的自衛権と領海警備法で十分であり、軍事力ではなく国際世論を生かした外交活動が重要であるとした。

柳澤氏は自衛隊のアフガン、イラン派遣時の事務責任者。新法制が日本国民の命を守るといふより日米の軍事的一体化、自衛隊の普通の軍隊化を進めるものだとして強調した。安倍晋三首相が防衛大学卒業式で新法制での任務を「今まで同様危険なもの」と言及したことについて「訓練と実戦とは全く異なる」と批判、自らが臆病だとの陰口をたたかれていることについて「現場には勇猛果敢さが必要だが、最高指揮官ほど臆病であってほしい」と注文を付けた。

バランスを考え2対2にしたが、議論するほどに問題点が出てくる。廃止法案議論のサポータージュ、訓練先送りの姑息……。やはりおかしい。

企画委員 毎日新聞社専門編集委員

倉重 篤郎

*3月末開催の小野寺、山崎、柳澤の3氏は4月号「ゲスト一覽」で既報

研究会「南海トラフ地震」 今、そこにある危機

今後30年間の発生確率は70%とされる南海トラフ地震。被害は東日本大震災をはるかに上回る可能性が高い。どうするのか。それを考えるのに最適な、地震と防災の専門家の連続会見だった。

「4月1日は肝を冷やした。プレート境界で起き、より大きい地震を誘発するタイプだった」と山岡耕春・名古屋大学大学院教授は言った。1日正午前、三重県沖の地震は南海トラフ地震が起きると想定されている場所で起きた。「地震の2日前から低周波微動が起きていた。巨大地震にならなかったのは、機が熟していなかったんでしょう」。南海トラフ地震は、もう目の前に迫っているのかもしれない。

山岡教授は「1年に2度、1週間ぐらいの期間で低周波微動が起きる。南海トラフ地震はそのとき起きるだろう」と考えている。

災害は進化する、といわれる。「関東大震災は火災、阪神大震災は住宅の倒壊、東日本大震災は津波だった。南海トラフ地震は津波に備えていればいいのか」と話し、次は「海拔ゼロ

メートル地帯の危険性」を挙げた。揺れが大きく、堤防が壊れることによって被害が拡大することを恐れる。

木村玲欧・兵庫県立大准教授は自らを「阪神淡路大震災世代」と言う。現在、40代の研究者には、震災の影響で防災関連の研究を始めた人が多いそうだ。

「21世紀前半は地震、異常気象などの大災害時代になる。地震などはめったに起きないものではなく、頻繁に発生して、そのたびに命を脅かすものという認識を持つべきだ」と話した。

釜石の奇跡に代表されるように、東日本大震災では大人に比べて、小中学生の犠牲者が少なかった。

ビデオで紹介された高知市の学校では、緊急地震速報が鳴ると、あっという間に生徒全員が机の下に潜り込んだ。例外は教師だ。大人は「これまで生きてきた」ことから「この次の瞬間も生きていく」という「連続性のワナ」に陥るといふ。

東日本大震災後、地元紙の記者らから「繰り返し啓発記事を書いたのに多くの犠牲者を出してしまった」と悔やむ声を聞いた。木村准教授は「助かった人はもっと多い」と伝えることの重要性を強調した。

東京新聞論説委員 井上 能行

達増 拓也 岩手県知事 すべての県民が 「希望」を持てる復興を

東日本大震災から5年、被災県の知事として走り続けてきた達増拓也知事が復興のキーワードとしているのは「希望」だ。廃墟と化した岩手県沿岸部の復興事業で最優先したのは「仕事の確保」。「まず、仕事と雇



用の場をつくらないと被災した県民が将来への希望を持てない」との判断から、5年間の努力の結果「なりわいの再生は8割程度回復した」と胸を張る。

一方で、住環境の復興・整備は遅れた。災害公営住宅の完成率は今年2月末時点でまだ48%にとどまるが、「これからは住宅最優先、今年度末までに9割を完成させる」と意気込む。

大震災以前から危機が叫ばれていたのが県の人口減少。「震災前5年

より震災後5年の方が減少幅が縮小した」という現実を「若者が地元志向を強めた結果」と分析し、若者や女性を復興の牽引役とするため住宅、教育、仕事、結婚、出産などの課題について「あらゆる政策手段を動員して『岩手の生きやすさ』を追求していく考えだ。

その一方で、県民の「夢」として「国際リニアコライダー（略称ⅡILC）」の実現にも挑む。ILCは、超高エネルギーの電子・陽電子の衝突実験を行うため、国際協力によって設計開発が進む「宇宙を作る加速器」の世界的ビッグプロジェクト。すでに県内の北上山地が有力候補地に選定されており「実現すれば万単位の研究者が集結するので、人的往来や経済効果で復興のシンボルになる」と力説する。

盛岡市で生まれ、東大―外務省―衆院議員（4期）という絵に描いたようなエリートコースを歩んだ達増氏だが、2007年4月に県知事に転身し、その1期目に大震災という未曾有の危機に直面した。控室で揮毫したのは「希望」の2文字。「どうすればいいかが分かれば希望が生まれる。その答えが見つかる岩手にしたい」と会見を締めくくった。

時事通信出身 泉 宏

ペトロ・ポロシenko ウクライナ大統領

G7でロシアに強いシグナルを

「不透明な取引は何もない」

各国首脳による租税回避地を利用した税金逃れの疑惑を暴露したパナマ文書の波紋が広がる中、4月5日に来日したウクライナのポロシenko大統領。翌日の記者会見はこの疑惑への質問が集中する異例のものとなった。



ポロシenko氏は2014年の大統領就任後に、経営する菓子メーカーの資産を英領バーミンガムの法人に移した。これについて「他の国の事例と大きく異なる。目的は大統領期間中に政治活動からビジネスを分離するためのものだ」と、身ぶり手ぶりを交え、繰り返し疑惑を強く否定した。

ウクライナ危機から2年余り。情勢が以前より沈静化し、中東やヨーロッパで大きな事件が相次いでいることで、ウクライナへの国際的な関

心が薄れてきているのは否めない。ウクライナ東部では停戦は成立したものの緊張が続く、政治対立や汚職の蔓延などで大統領の足元が揺らいでいる。東部2州に特別の地位を与える憲法改正は実現のめどが立たず、問題の唯一の解決策とされるミンスク合意の完全履行は難しい状況だ。

G7サミットを前にウクライナへの国際的な支持を取り付けたいポロシenko大統領。ロシアについて、「今なおウクライナの領土を占領し、兵士や兵器を送り続けている」と厳しく批判した。そしてG7サミットでは「ウクライナ支持で一致した立場を示し、ロシアに対して強いシグナルを送ってほしい」と求めた。

また安倍総理がロシアを訪問し、プーチン大統領と会談する際、ロシアに停戦合意の履行や軍の撤退を働きかけるよう期待を表明した。

G7の中でも対ロ制裁の継続に消極的な意見があり、日本側はウクライナに対し停戦合意を完全に履行するよう注文を付けている。ウクライナ問題がG7の議題のone of themになりつつある中、ウクライナとしても合意の履行に向けた強いシグナルを出すことが求められている。

NHK解説委員 山内 聡彦

平井 久志 立命館大学客員教授

北朝鮮、党大会も成果は望めず

北朝鮮は核実験をしミサイルの発射を続けるが、国威発揚の総仕上げになるのが5月6日開幕の労働党大会だ。36年ぶりの党大会で、何が討議され、決定されるのか。

党大会は軍、地域、職域の代表が参加する、最も権威がある会議であり、ここで「金正恩時代」が公式にスタートする。父の金正日総書記は「先軍政治」を掲げたが、正恩氏は党に権力を一元化させ、軍を指導する体制をめざしている。実際に政策を立案、遂行する党の部長や副部長たちは40〜50代が中心となり、世代交代がかなり進むとみられる。

核開発を続けながら経済発展もめざすという並進路線を、いっそう強く打ち出す。



北朝鮮は現実には南北共存の道を進んでいるのだが、党大会では新たな南北統一の構想が発表されよう。平

韓国側も統一構想をテーマにした対話に前向きになるが、軍事的脅威が高まっている現状では、朴槿恵政権は南北和解の動きには応じないだろう。

1990年代半ばの飢餓の時代に小規模な市場が各地にできた。今や全国に拡大し、国家の経済はかなりの部分を市場の活動に頼っている。個人の所有権はともかく、利益権を認めるような新しい経済政策が提示されるのではないか。

全体的に見て、準備不足を押して開催する党大会は成果に乏しいものになるだろう。年初からの核、ミサイル実験の成果を強調して、「対米勝利」の宣言ばかりが目立ち、中国など友好国の代表団が来ず、国際的な孤立の中で内向きの大会になる可能性が高い。

以上が共同通信のコリアウオッチャーとして活躍した平井さんの、労働党大会についての見立てである。北朝鮮の公式報道は特有のレトリックで書かれるので、予備知識がないと何が大事なかわからない。平井さんの発言と的確にポイントをとめたレジュメは、党大会のニュースを理解するのに必ず役立つはずだ。

企画委員 東京新聞論説委員

山本 勇二

■記者ゼミ第4期始まる
次世代ジャーナリストの
必須IT講座

第4期記者ゼミが5月からスタートする。今期のメインテーマは「次世代ジャーナリストの必須IT講座」。第2、3期を通じてネット時代を迎えたジャーナリズムの最前線と課題、あらためて問われるジャーナリズムの原則をめぐる諸問題を取り上げてきた流れを受けたものだ。

話題の「パナマ文書」報道でも分かるように、世界の報道の潮流はデジタルデータの取り扱いがキーワード。人にインタビュース、記録文書を入力・分析するというこれまで培われてきたジャーナリズムの基本動作の重要性に変わりはない。

だが、ネット時代ではあらゆるデータがデジタル化されている。このデータをどのように入手し、解説・分析し、分かりやすい表現をすることで意味ある情報としてニュース発信できるか――。「紙とペン」さえあれば、といっているだけでなく、記者自身がこのIT（情報テクノロジー）を使いこなせることが求められ始めている。

講座は、プログラムの知識がない初心者でも参加できる基礎編から始まり、本編、応用編へとレベルアップを図る内容となっている。主な講師は加盟社の習熟者をお願いし、共に学べる形をとる。4月に開いた「プレ講座」には13社から47人が参加し、関心の高さがうかがえた。多くの一線記者の参加を期待している。当面のスケジュールは左表。

第3期「次世代ジャーナリズムの現場―その原則とスキル」は予定の16回に加えて、デジタル・ジャーナリズムの初歩的な手法などを学ぶ「エキストラ講座」もあり、盛況のうちに終了した。参加者はネット視聴も含めて延べ合計511人だった。

特別企画委員 橋場 義之

◇ステップ1 基礎編◇ いずれも午後2時から。クラブ会議室で

テーマ	日付	内容	目的
第1回 セキュリティ& コマンドライン	5・10(火)	セキュリティの基礎知識	自分を守る
		暗号メール、UBS sanitizer	情報源を守る
		コマンドライン演習	作業の効率化・検証
第2回 データの洗浄	5・24(火)	OpenRefineの演習	「汚いデータ」の 正規表現
第3回 GIS入門	6・7(火)	地理データの基礎知識	地図の描き方
		QGISの演習	分布データの分析
第4回 映像の文法	6・21(火)	映像記事の基本構造	プロの映像は何か 違うのか
第5回 HTML/CSS入門	未定	音声と編集の技術	
		HTMLとCSSの仕組み	デジタル文書の 根幹
第6回 データの分析	未定	javascriptによるアニメーション	
		表計算ソフトの復習	データ分析ができる
		統計ソフトRの演習	

■会議報告

●2016年度日本記者クラブ賞・同特別賞選考委員会
(4・6 日本プレスセンター特別会議室)

鬼頭クラブ賞推薦委員長代行の報告のあと選考に入り、クラブ賞に尾崎真理子氏、特別賞に堀川恵子氏を受賞者として理事会に答申した。

出席 原田委員長、西村、小田、飯塚、深田、岩田、袴田、篠塚、西沢、川嶋、木村の各委員。伊藤理事長、水谷、板野の両副理事長、中井専務理事。

●第372回会報委員会

(4・8 大会議室)

5月号の編集について協議した。
出席 飯塚委員長、稲沢、高橋、鈴木、渡辺、吉澤、大寺、長崎、藤井、藤澤の各委員。

●第464回会員資格委員会

(4・13 ゴールドルーム)

5月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 小田委員長、菊池、石田、井上、山本、國府、青木の各委員。

●第462回企画委員会

(4・15 会見場)

参院選「党首討論会」の実施要領を協議したほか、第19回記者研修会や今後のゲスト候補も検討した。

出席 西村委員長、恵村、安井、倉重、脇、実、水野、宮田、杉田、川

上、軽部、加藤、山本、宇留間、島田、竹田、川戸、播摩、和田、梶本、橋場の各委員。

●第43回監事会

(4・22 ゴールドルーム)

2015年度の事業報告と同収支決算案の監査を行った。

出席 沖永、林、二木の各監事。

●第582回理事会(書面)

別掲(21頁)の役員の一部交代を承認した。

●第121回総務委員会

(4・27 小会議室)

2015年度の事業報告・同収支決算の原案を作成、理事会に上程することにした。

出席 原田委員長、増田、飯塚、深田、篠塚、西沢、川嶋の各委員。伊藤理事長、水谷、板野の両副理事長、中井専務理事。

●第583回理事会(4・27 会見場)

①15年度事業報告・同収支決算を総務委員会案どおり承認し、定時社員総会に上程することにした。

②16年度日本記者クラブ賞・同特別賞を選考委員会の選考結果どおりに決定した。

出席 伊藤理事長、水谷、板野の両副理事長、中井専務理事。増田、原田、飯塚、深田、藤井、渡邊、菅生、篠塚、西沢、吉田、川嶋、西野の各理事。沖永、林の両監事。

熊本地震

丸野 真司（熊本日日新聞社）

耐乏生活続く避難者 新聞の「生活情報」に信頼高まる

「ドンドン」。背中を突き上げるような衝撃で目が覚めた。家中が音を立てて揺れ動く。少し揺れが収まったところ、携帯電話が鳴った。

「輪転機が止まりました」

4月16日午前1時25分。震度7、マグニチュード（M）7.3の激震が熊本を襲った。熊本市にある熊本日日新聞社の本社は停電し、印刷中の輪転機も急停止した。

車で本社に向かった。途中の公園には、着の身着のままの市民たちが続々と避難してきていた。これまでに見たこともない異様な光景だ。

西日本新聞に印刷依頼も 何とか自社の輪転機回る

約15分後、会社に着いた。4階の編集局フロアまで駆け上がると、倒れてきたロッカーや机が散乱する中で、当番の編集部長ら数人が対応策を協議していた。朝刊は3分の1印刷したところでストップ。「短時間での輪転機の復旧は難しい」。印刷

局からの報告に覚悟を決めた。

午前2時半すぎ、最短距離にある西日本新聞社に電話を入れ、災害援助協定に基づく印刷委託をお願いした。幸い電気が回復し、懸命の復旧作業で午前4時ごろ、何とか輪転機が回せる見通しがついた。この間、8ページ分のデータを送信したが、最終的に印刷には至らなかった。

強い余震が続くなか、記者たちがこわばった顔で出社してきた。阿蘇



地震で倒壊した家屋から助け出される住民（4月14日午後11時30分ごろ／益城町惣領／熊本日日新聞社写真部・大倉尚隆撮影）

で橋が落下し、生き埋め多数という情報が舞い込み取材陣を送り出した。

実は、必死に印刷している16日付朝刊は、14日夜に益城町などを襲った震度7（M6.4）の前震の被害状況をまとめた紙面だ。16日未明の本震については1行も触れていない。朝刊印刷と同時に並行で4ページ号外、さらに夕刊づくりを進めた。朝刊の印刷が終わったのは夜も明けた午前7時すぎだった。

ほとんど徹夜の取材編集だが、記者たちの原動力となったのは新聞に対する読者の熱い思いだ。2日連続で号外を避難所に届けた。停電でテレビなどの情報が届きにくいなか、食い入るように読んでもらった。

ネットの功罪交錯するなか 正確な情報を届ける

避難者は最大18万人に達した。この数字には車中泊している被災者は含まれていない。県民を一番苦しめたのは、いつ終わるかしない余震だ。道路や鉄道、電気、水道、ガスなどライフラインの寸断が追い打ちをかけた。食べ物、飲み水がない。あちこちで悲鳴が上がった。

生活情報を詳細に伝えるため、紙面を大きく割いた。避難所での配給や給水、ガス、交通、医療、教育、

ごみ出し、店舗情報などを網羅した。被災者が何を必要とし、どんな不安を抱いているのか、日々変わる。同じ被災者であり避難生活をしている記者たちが知恵を出し合った。

避難所には連日新聞を届けた。ある避難所では20部届けてもすぐなくなり、50部、100部と増やした。「熊日さんが頼り」という声は、全ての従業員の心を奮い立たせた。

号外や毎日の紙面をPDF化してネットで公開した。フェイスブックでも生活情報を刻々と更新。被災者からの要望も受け付けた。応援メッセージを募ると、台湾や韓国などから励ましや寄せられた。半面、「ライオンが逃げた」などのデマも流れた。ネットの功罪が交錯するなか、地元紙として正確な情報をネットでも届ける責任を痛感した。

これから検証作業が必要だ。九州の中央にある熊本でなぜ生活物資が不足し、避難生活が長期化したのか。エコミークラス症候群などで多数の命が失われたが、なぜ防げなかったのか。生活再建の道のりは長く、険しい。被災者と共に歩みながら、息長く報道を続けていく覚悟だ。

まるの・しんじ▼1980年入社 社会部長 編集局次長などを経て 2014年から編集局長

パナマ文書流出

澤 康臣(共同通信社)

記者の国際協力が パンドラの箱を開けた

「調査報道部への提案」。そう題された1通のメールが始まりだった。友人ジャーナリストのシッラ・アレッチからで「今、あるプロジェクトに関わっている」と言う。今年2月のことである。調査報道を手がける共同通信の常設部署、私たち特別報道室の存在を覚えていてくれたようだ。

シッラいわく、各国の新聞、テレビなどの調査報道記者でつくる米国の組織「国際調査報道ジャーナリスト連合(ICIJ)」が調べているテーマがある。中身はまだ言えない。一緒に取材し、できれば英語でも発信できる日本の報道機関を探している。日本では既に朝日新聞が入っている。そして「共同通信は興味があるか」と問う。

興味があるかと聞かれて「ない」と答える記者はいない。共同通信とICIJの共同作業は、こうして始まった。

税金が極端に安いタックスヘイブ

ン(租税回避地)は、匿名性の高い法人をつくりやすいのも特徴だ。そんな法人設立の手続きを手がけてきた法律事務所の1つがパナマの「モサック・フオンセカ」である。同事務所が厳重保管していたはずの内部文書を、欧州の有力紙・南ドイツ新聞が大量に入手した。同紙はICIJに協力を呼びかけて文書を提供し、ICIJは英ガーディアン、BBC、仏ルモンドなど各国メディアの調査報道記者が力を合わせて分析、取材する取りまとめを行い、世界的にタックスヘイブンの実態を報じようというのが、このプロジェクトだった。

1日1000通読んでも30年 膨大な極秘データ

共同通信がICIJと合意に達してプロジェクトメンバー報道機関となり、この目で「パナマ文書」に接することが許された日、私たちは驚きや感銘より、ただ途方に暮れた。

2・6テラバイト、11000万通に上る文書である。1日1000通のペースで読んでも30年かかる。会社の設立証明書、株主名簿、役員名簿、手数料請求書、手続きに必要な身分証明書のコピー画像データ、メール：まずはこの中から日本関係を掘り出すのが私たちの任務となった。

見つけたデータを、政治・経済・外信・社会各部の経験を持つ特別報道室のメンバーがそれぞれ知識を生かしながら「ブツ読み」し、ニュースのポイントを見だし、分担して関係者に裏付け取材を繰り返した。執筆作業は時間との闘いになっていった。米東部時間4月3日午後2時(日本時間4日午前3時)が、ICIJの決めた世界一斉記事解禁時間である。各国メディアと並び、共同通信と朝日新聞も報道を始めた。

国境越えたプロジェクト 仲間意識感じる機会に

パナマ文書は有力政治家や富豪の隠れた経済活動を示す資料が詰まった「パンドラの箱」だが、どんなスパー国際派記者であっても一人で全てを読み解くことは不可能だ。内容はあまりにも多くの国にわたり、量も膨大ときている。そこでICIJによる記者の国際協力が意味を持

ってくる。例えば、ロシアのプーチン大統領の友人の名前にピンとくるのは、ロシアに詳しい記者だ。地元国のことを地元の記者が調べ、情報と記事を共有する。

今回のプロジェクトには、普段からICIJに参加しているメンバー以外も含めて70以上の国、100を超える報道機関から400人近い記者が名を連ねている。

プロジェクトに参加した英紙ガーディアンのルーク・ハーディング記者は英メディア業界紙「プレス・ガゼット」に「調査報道には費用もかかる。やっけていくには自社も他社も力を合わせた国際的な連合を組むことだ」と話す。「素晴らしいデータジャーナリストもいたし、金融の知識がすごい記者もいた。私はそれを普通の人が分かるように書くのが仕事」と謙遜する彼は、しかしロシア当局から国外退去処分を受けたこともある、鋭いプーチン政権ウオッチャーだ。

パナマ文書プロジェクトは、そんな彼らに私たち日本の記者が学び、国境を越えて記者の仲間意識を感じる、比類ない機会でもあった。

さわ・やすおみ▼1990年入社 社会部 外信部 ニューヨーク支局を経て
2014年5月から特別報道室次長

シャープ買収劇

松岡 達郎（産経新聞社）

調印会見、対照的な2人 かたや疲弊、かたや満面の笑み

経営再建中のシャープが台湾・鴻海精密工業傘下に入る契約を結んだ。4月2日の調印式では、鴻海の郭台銘会長は日本の老舗電機メーカーを手に入れた高揚感からか、「シャープにフルサポートを約束する」と得意満面だった。

調印式の会場は、堺市で両社が共同運営する液晶パネル生産会社だ。都内のホテルを準備していたが、鴻海の意向で変更した。不振の生産拠点を鴻海との共同運営で黒字転換した「協業の象徴」をアピールしたかったのだ。異例の土曜日の調印は騒ぎだ。3月30日に両社が買収案件を決議した翌日は、暦の上で縁起の悪い「赤口」、その次もエイプリルフル。4月2日は風水で縁起が良かったという。

日台の報道陣ら約300人を収容した会見場は、前列に陣取った鴻海関係者がサクラよろしく、郭会長の発言にことさら拍手するなど、独特の雰囲気だった。産経新聞は会見を

紙面だけでなく、ウェブニュース「産経WEST」で伝えるべく記者を配置したが、テーブルと電源のない会場に苦しんだ。記者たちはパソコンを膝に置き、電池残量を気にしながら2時間40分の会見の詳細を書き続けることになった。

会見で、シャープの高橋興三社長は「交渉で鴻海のすさまじいスピードとパワーに驚いた」と語った。実感だろう。「上司にNOと言わなかったことで出世した」と語る高橋社長と、グローバルビジネスで鴻海を



調印式で握手する(右から)シャープの高橋興三社長、鴻海精密工業の郭台銘会長と戴正呉副総裁(4月2日/堺市/産経新聞社提供)

電子機器受託製造サービスの世界最大手に成長させた郭会長では役者が違ったのだ。

見抜かれていた 銀行管理経営の「急所」

もともとシャープは、3千億円規模の出資を提案していた官民ファンドの産業革新機構との提携に前向きだった。4年前に合意した資本業務提携を破談にした鴻海への不信感が根強かったからだ。前言撤回が相次いだからだという。それが今年に入り鴻海が勝負に出た。拠出規模を5千億円から6600億円に引き上げ、主力行には革新機構と違って追加の金融支援を求めない姿勢を示した。シャープには「事業売却はしない」「雇用維持」「経営陣は残留」など好条件を並べ、経済合理性を理由に社外取締役を中心に鴻海支持が広がり、主力行も鴻海案に傾いた。

生え抜きの取締役に鴻海アレグジーがあったが、高橋社長らに銀行の変心に逆らう選択肢はなく、郭会長は、事実上の銀行管理経営の急所を突いて形成を逆転した格好だ。

「鴻海優先」のニュースが駆けめくった2月4日、実はシャープの取締役会で決議したのは鴻海と革新機構の両案の継続審議だった。郭会長が

破談もほのかして、革新機構より優位と強調することを求めたという。実際、鴻海と交渉を本格化させる必要があったため、高橋社長は「人材を多く割いているのは鴻海の方」と語った。革新機構に気遣いながら鴻海の要求に応える苦渋の表現だった。

翻弄された経験 再建の糧となるか

2月25日、シャープが鴻海を買収受け入れを決議してからわずかだった。今度は鴻海が、前日に受けた偶発的な債務リストを理由に契約を保留した。シャープ社内に既視感がよぎっただろう。結果、革新機構が撤退して退路を失った弱みにもつけ込まれ、出資金は約1千億円も値切られた。破談の場合、シャープの液晶事業を鴻海が買い取ることができると読み取れる条項が盛り込まれた。

会見では、譲歩を重ねたサラリーマン社長の疲れた表情と、タフな交渉の結果に満足する世界企業の創業者の笑みが印象的だった。シャープには交渉で洗礼を受けた世界標準を今後の再建の糧にもらいたい。

まつおか・たつろう▼1992年入社
社会部 経済部 神戸総局長などを経
て2012年から大阪経済部次長

被災地通信 ④ 茨城県

「忘れられた被災地」 風化防止へ 伝え続ける

松下 倫 (茨城新聞社)

「3・11」から5年を間近に控えた3月7日、茨城県庁の県民ホールに東日本大震災による地震や津波で止まったままの時計や割れたガラス片、被災状況を伝える写真など約300点が展示された。

県が収集した震災の記録や資料の展示会で、震災の記憶や教訓の風化を防ぎ、後世に伝承するのが狙い。記録や資料の提供を県民や関係機関などに呼び掛けたところ、写真や物品のほか、映像、体験談、記録集など計5万点以上が寄せられた。

会場では、来庁者が震災直後の



東日本大震災の地震や津波で止まったままの時計や、被災状況を記録した写真などを熱心に見る県民ら
(3月7日／茨城県庁／茨城新聞社提供)

生々しい写真や津波の映像などに見入りながら、当時の体験を語り合う姿が多く見られた。水戸市の70代女性、車で海岸方面の親族宅に向かう途中で震災に遭遇。津波が近づく中、親族たちの安否を気遣いながら、市内の自宅に戻らざるを得なかった苦い体験談を話してくれた。

県は各市町村で巡回展示を行うとともに、16年度中に収集物をインターネットで公開する予定。担当者は「防災についてあらためて考える一助になれば」と説明した。

■インフラほぼ復旧も
被災者の生活再建は道半ば

東日本大震災では茨城県内も地震

や津波、液状化の甚大な被害に見舞われた。人的被害は死者24人、行方不明者1人、震災関連死41人、負傷者は重傷34人を含む計712人。住宅被害は3月末現在、全壊2630棟、半壊2万4373棟、一部損壊18万7358棟など。断水は全国最多の約80万戸に上った。

あれから5年。県内インフラは一部を除いておおむね復旧・復興が完了した。震災の傷痕は癒えたかのようにも見えるが、被災者の生活再建はまだ道半ばだ。震災や東京電力福島第一原発事故に伴い、福島県を中心に今も4千人近くが県内で避難生活を余儀なくされている。

さらに県人口は震災後、毎年1万人規模の急激な減少が続く。昨年10月の国勢調査では、前回調査時から5年間で5万1913人減少した。

茨城県は震災発生直後から「忘れられた被災地」だった。しばらくは救援物資などが本県を素通りして東北の被災地に送られ、県内が計画停電の対象とされかけたこともあった。東北3県と比べ被害の規模が小さいため、国の支援措置などはどうしても3県と差が付けられがちだ。

震災から5年を経て、東北被災地のニュースが伝えられる中、茨城県はほとんど話題に上らなかった。

「水害半年」と重なる「震災5年」

昨年9月の関東・東北豪雨で茨城県は再び「被災地」となった。鬼怒川などが決壊し、常総市を中心とする県南西地域が大規模水害に見舞われ、3人が死亡。住宅被害も全壊54件、大規模半壊1782件、床上浸水185件など甚大で、被災者の生活再建や復興が現在も進められる。茨城県にとって、「震災5年」は「水害から半年」の節目と重なった。

県は16年度、震災の集中復興期間終了に伴い、「災害に強い県土づくり」にかじを切った。大規模災害に備えた国土強靱化地域計画を策定中で、震災や豪雨災害の教訓を踏まえた防災・減災対策に乗り出す。

そんな中、発生したのが熊本地震だ。テレビに被災現場や避難所の様子が映し出され、緊急地震速報を耳にするたびに震災当時の記憶がよみがえり、身がすくむ思いがした。

もはや「天災は忘れた頃にやってくる」では済まされない。震災を風化させないためにも、震災の記憶や防災対策などを伝え続けるのが、地元紙の使命と実感している。

まつした・ひとし ▼1996年入社 運動部 鹿嶋支社 行方支局などを経て 2009年4月から報道部県政担当

私が会った
あの人

「政治記者になりなさいよ」

田中元首相の地元筆頭秘書 本間幸一さん

丸山 昌宏（毎日新聞社）

田中角栄元首相の地元筆頭秘書として「国家老」の異名をとった本間幸一（本名・昂一）さんに、とうとうお礼を言うことができずに終わったことを今でも心残りに思っている。本間さんは5年前、88歳で亡くなってしまった。

私が本間さんと最初に会ったのは1981年4月、入社3年目で振り出しの新潟支局から長岡支局に異動した直後だった。

当時、田中元首相はロッキード事件第一審で被告人の立場にあり、「新潟3区」担当になったらず後援会「越山会」にあいさつをと、事務所を兼ねていた越後交通本社秘書課を訪ねた。「国家老」という言葉から怖い人を想像していたが、まるで違った。穏やかで、痩せて首が長い「鶴のような人だな」が、最初の印象だった。当時は、朝起きると担当する7

つの警察署に電話取材し、そのまま家を出て越後交通本社に顔出しするのが日課だった。長岡支局勤務の2年間、よく通った。本間さんは時間が許せば駆け出し記者の私にも気さくに会ってくれた。実際の本間さんは博識で、クラシックにも造詣が深く、秘書というより文化人といった方が似合った。

「オヤジが田舎で選挙に強いのは、最初に出たころ、長岡の旦那衆にはまったく相手にしてもらえなかったから。道もない所をそりに乗って、誰も行かない村落まで支持者を探して行くしかなかったんですよ」

「（冬に雪で道路が閉ざされる）孤立集落に1本ですが、オヤジがあちこち掛け合って電話を引いたんですよ。そうしたらその集落がいっぺんに田中支持になりましたね」
「バスで後援会の人たちを東京に連れて行くでしょう。最初のころは



田中元首相の著書『日本列島改造論』を手に田中真紀子元外相の衆院選応援演説をする本間幸一氏（2003年10月28日／毎日新聞社提供）

必ず国道1号線をただ走ってもらった。同じ日本なのに東京では冬でも車がばんばん走っている。新潟はどうですか。不公平じゃないですか」

本間さんからはさまざまな話を聞いた。田中元首相が選挙に出た当初から行動を共にし、地元での選挙を取り仕切ってきた人だけに、経験に裏打ちされた話は実におもしろかった。

でもそうした会話の最後に本間さんから、よく「将来は政治記者になりなさいよ」と言われた。若気の至りで、そう言われるたびに「世の中を少しでも良くしたいと思って新聞記者になったんですから、やるなら社会部です」とつい反発してしまっただ。本間さんは「それならなおさら政治記者になればいいのに」といつも笑っていた。同じやりとりが何度

も繰り返されたことを覚えている。

その後私は、希望通り社会部記者になったものの、3年もたらずに政治部異動を命じられ、結局、記者生活の大半を政治記者として過ごすことになった。しかも、政治部では田中元首相と袂を分かった竹下派担当となり、なんとなく「本間さんに会わせる顔がないな」と躊躇しているうちに本間さんは亡くなってしまった。

本間さんが若い記者みんなに政治記者を勧めていたのか、それとも私の適性をみて助言してくれたのか、今となっては不明だ。ただ、本間さんとの会話が私の政治記者の土台を作ってくれたことは間違いない。もう一度会って「生意気言いました、政治記者になりました」と言ったら、本間さんは何と言ってくれただろうか。

（まるやま・まさひろ 常務取締役）
次号は吉田文和さん（共同通信社）にバトンが渡ります。

暴力団が毎日新聞社を襲撃 政治家とのぐくされ縁に批判に腹いせ

新実 慎八



にいのみ・しんぱち

1932年生まれ 56年毎日新聞社入社 編集局次長 総務局長 広告局長 取締役中部本社代表 常務取締役管理部門統括 広告担当など歴任 退任後はパレスサイド・ビルディング(現毎日ビルディング)代表取締役 公益財団法人海外日系人協会常務理事など 現在 一般社団法人海外日系新聞放送協会理事長

いまから半世紀余りも昔のことであるが、1960(昭和35)年は国内で次々に大きな出来事が発生した激動の1年だった。6月、空前の盛り上がりを見せた「安保闘争」。10月には演説中の浅沼稻次郎社会党委員長が右翼少年に刺殺された。二つの事件の間には、岸信介首相と社会党顧問の河上丈太郎衆院議員が、それぞれ暴漢に襲われて負傷。さらに訪日が決まっていたアイゼンハワー米大統領に対し、岸政権は治安不安を理由に訪日中止を要請するという失態を演じた。

そしてもう一つ、これらの事件に先立って4月2日未明に発生した暴力団の毎日新聞社襲撃事件——言論の自由に暴力団が真っ向から挑戦した初めての出来事である。

◆輪転機に砂まき散らす

「毎日新聞社襲撃」は、こんな状

況だった——同日午前4時15分。当時、有楽町のそごう(現在はビックカメラ)前にあった毎日新聞社に車で乗りつけた暴力団幹部ら二十数人が、いきなり印刷工場に乱入し、朝刊の最終版を印刷中の輪転機3台に砂袋を投げつけた。輪転機は直ちにストップ。暴徒の一部は、さらに發送場に駆け上がり、発煙筒を焚き、消火弾を発射、新聞の梱包を手あたり次第投げ飛ばし、新聞仕分け台をひっくり返すなど、暴れまわって發送場をめちゃめちゃにした。

發送事務室、宿直室、休憩室のガラス窓も破壊して外へ飛び出し、待たせていた車に飛び乗って逃走した。車に乗り遅れた3人を駆けつけた丸の内署員が逮捕した。

暴力団組員の組織的犯行であることはすぐわかった。彼らは半月前の3月14日夕刊社会面に私が書いた記事に不満を持って因縁をつけ、記事

取り消しを要求して組の幹部が来社、社会部と折衝が続いていた。しかし毎日新聞社が断固拒否したため、報復に転じ本社襲撃に出たものだった。問題の記事は「親分夫人の葬儀に、大勢の政治家が花輪を贈った」事実を批判的に報道し、政治家の実名を挙げて暴力団とのぐくされ縁を暴いたものである。「政治結社」を名乗っていたが、実態は暴力団であることをはっきり書き込んだ。

警視庁の説明では、この暴力団は銀座に興行会社の看板を出していたが、実際にはばくち、債権取り立て、パチンコ景品買い、用心棒などでも稼ぎ、暴力団と変わりのないという。警視庁捜査4課によると、この前年の構成員の逮捕者は294人に上った。

このころ毎日新聞は紙面で暴力団追放のキャンペーンを展開していた。私が入社した1956年には長期連載の「暴力新地図」で暴力団の

実態を暴き、翌57年に日本新聞協会が設定した「日本新聞協会賞」の第1号を受賞した。社会部の意気は大いに上がり、暴力団追放の紙面づくりに情熱を注いでいた。そんな雰囲気の中で、私は暴力団関係の取材に力を入れていた。

1960年3月に入って、暴力団担当のある刑事が巻紙の葬儀通知回状——いわば挨拶状を見せてくれた。長さ8・2メートルの立派な和紙の挨拶状には、会長夫人の死去に伴う葬儀の日取りから式次第、さらに葬儀委員長に当時の都内の大親分の名前などが詳しく書かれていた。

◆親分夫人葬儀に花輪ずらり

その中で私が注目したのは、元警視總監田中栄一氏、元文相松永東氏ら衆院議員13人、参院議員4人をはじめ東京都知事、都議会議員、近県の県議会議員など50人近い政治家



発送場も襲われ、めちゃくちゃになった
(毎日新聞社提供)

が、葬儀に参列あるいは花輪を贈ることが書き込まれていたことである。事実ならば政治家の名前の入った数十本の花輪が浅草・長敬寺の周辺に盛大に並ぶことになる、と私は判断した。この事実を葬儀当日に確かめて、政治家との癒着ぶりを報道しようと考えた。

葬儀当日の3月14日、浅草の式場周囲300メートルほどの地域には大きな花輪と黒い喪服の若者が並んでいた。私は通行人を装って政治家名を確認して本社に連絡。記事は夕刊最終版に間に合った。見出しは「政治家の花輪ずらり」「親分夫人の葬式」くされ縁に批判」だった。

記事掲載から4日後の同18日、毎日新聞社に長い巻紙の抗議文が届いた。そこで話を聞くため警視庁クラブのキャップが先方と接触し、同日

午後やって来た幹部らと毎日側が、日比谷公園内の松本楼で会談した。執筆者の私は、警察も加わって相談した結果、直接攻撃目標になる恐れがあつて危険と判断し、一切接触しないこととした。会談にも出ず、筆者名も明らかにしないことにした。

◆記事取り消しを断固拒否

松本楼に來た幹部ら6人は、ダブルの黒い背広にサングラスの男や、こぶしでテーブルをたたいて威圧する若者などなかなかのもので「掲載した記事の大ききで訂正を出せ」「できないならこつちにも覚悟がある」「今日は帝国ホテル組(おとなしい連中の意味らしい)ばかり連れてきたんだ」と激しく迫ってきたという。

これに対し毎日側は「政治結社と届け出ていても実態は暴力団であり、警察もそう見ている」「公職の地位にある政治家が、暴力団の身内の葬儀に公職名で花輪を贈るのは不見識」と説明し、記事の取り消しには応じなかった。会談は1時間にわたつたが相手は納得せず、その後も再三記事の取り消しを申し入れてきた。襲撃を受けて、警視庁から特に個人の身辺警護の申し出があり、毎日新聞社の社長、編集局長、社会部長、警視庁クラブキャップ、それに執筆者の私の5人の身辺警護をお願いすることになった。警護は「刑事の内

張り」と「パトカーを配置した自宅周辺の警戒」であつた。「内張り」は拳銃を持った刑事が対象者の自宅内で寝ずの張り込みをし、パトカーによる警戒は自宅周辺に2台が集結し、無線で連絡しあうもののしきであつた。

襲撃した犯人を全員逮捕するまで1週間ほど警戒が続いたが、自宅のワンルームのアパートで内張りの刑事が寝ずの番というのは、なんとも落ち着かない。女房も、生まれて半年の長男とともに実家に帰した。当時警視庁クラブの私は、朝起きれば警視庁へ飛んでいくし、夜は刑事宅の夜回りへ帰宅は深夜の2時〜3時、自宅にはわずかな時間、寝に帰るだけという生活であつた。

警視庁は丸の内署に捜査本部を置き、数日後までに幹部ら25人全員を威力業務妨害、建造物侵入、暴力行為処罰法違反などの容疑で逮捕、起訴した。また東京地裁は10月31日の判決で、事件に関係した全被告を有罪とした。

この事件のあと各新聞とも意欲的に暴力団追放の記事を特集した。毎日新聞は根深い暴力の実態にメスを入れた紙面を特集した。今、当時の紙面を反省しても遅すぎるが、毎日として事件後もっと暴力団と対決する特集、特に葬儀の回状に名前が挙がっていた政治家全員に、暴力団との

関係を聞きただしておく必要があつたと思う。回状にまで名前が載る関係について「公人」たる政治家の責任として、社会に説明する必要がある。

◆生き続ける、やくざ世界

事件後50年余の今、政治家と暴力団との関係がいまだに残っているのは、これまでの新聞の取り組み、監視が不十分だったということでもある。特に政治家と右翼暴力団の結び付きの実態を明らかにできなかったこと、政治家が右翼暴力団をいかに利用し、暴力団も政治家と結んでその勢力をいかに維持し、伸張させていたか、ここまで踏み込めなかった不明を恥じる次第である。

70年前、敗戦日本に進駐してきた米軍が、日本の社会に巣食っている「親分・子分制度」に特段の関心を持ち、「やくざ組織」の除去に取り組んだとされている(『日本占領史1945〜1952』福永文夫著、中公新書)。GHQ内で検討し、日本社会の暗部に斬り込む声明を出したが、「キャンペーン」はそれ以上進まなかったという。敗戦3年目、効果の上がりにくいやくざの世界に取り組みより、ほかに優先して実施すべきGHQの仕事は多いという判断があつたようだ。いずれにしても、やくざの世界は温存され、いまだに生き続けている。

マイBOOK マイPR

核に魅入られた国家 知られざる
拡散の実態
会川 晴之
(毎日新聞社北米総局長)

連載「核回廊を歩く」を再構成 パ
キスタン、イラン、そして日本の核
開発現場を丹念に歩き取材した書。
取材開始から2年。毎日新聞に連載
した「核回廊を歩く」を加筆・修正
した。核兵器開発の実態から、秘密
のベールに包まれている核拡散の手
口、さらに、これまで書かれること
がなかった日本の意図せざる拡散に
も踏み込んだ。日本の核拡散の実態
に初めて切り込んだ「日本編」は、
科学ジャーナ
リスト賞20
16の受賞が
決まった。



毎日新聞出版
1782円

国際情勢に強くなる英語キーワー
ド(岩波ジュニア新書)
明石 和康
(時事通信社解説委員)

世界情勢理解の教材にも 特派員時
代には、常に英語で苦労した。しか
し、国際情勢をフォローするには、
やはり英語の腕を磨くことが必須
だ。本書は、大学生や高校生、それ

に若いビジネスマンを念頭に、国際
情勢を理解するために必要な英語の
単語や表現を厳選して、解説を試み
た。若い人たちにはぜひ、海外ニュ
ースに関心を持ってもらいたい。ま
た、英語でニュースを理解できるよ
うになれば、必ず発信力にも良い影
響が出るはず
だ。そんな思
いも執筆の背
景にはある。



岩波書店
864円

プーチンとG8の終焉(岩波新書)
佐藤 親賢
(共同通信社外信部)

「米主導」と対極の世界観 ロシア
のプーチン大統領は覇権主義者でも
なければ、伝統的な意味での「独裁
者」でもない。クリミア半島を実力
で「取り戻した」手法は支持できな
いが、リスクを冒してこの決断をし
たのはなぜなのかは、あまり理解さ
れていない。本書では、この疑問に
自分なりの答えを見いだそうとし
た。偏見を持たずにプーチンの主張
に耳を傾ければ、「米国主導」に慣
らされた日本での一般的な見方とは
対極の世界観
を知ることが
できる。



岩波書店
864円

水俣病を知っていますか(岩波ブッ
クレット)
高峰 武
(熊本日日新聞社論説主幹)

60年の「実相」知ってほしい 編集
者の提案に少々戸惑った。本のタイ
トルである。「水俣病を知っています
か」というのは、熊本では何を今さ
ら、という感じがするからだ。しかし
よくよく考えてみれば、どれほど水
俣病のことを知っているか、本書が入
門書的な狙いがあるとすれば案外、
いいタイトルではないかと思えてき
た。水俣病事件は2016年5月1
日で公式確認から60年。人では言え
ば還暦だ。これほど長い期間が経過し
たのになぜ未解決なのか。今も第1
号の患者は懸命に命を刻んでいる。
多くの人に60
年の「実相」
を知ってほし
いと思う。



岩波書店
626円

会員の皆さんが出版さ
れた本を「マイBOOKマイ
PR」でご紹介します。200
字程度で内容や狙いをお
まとめください。お問い
合わせは下記までお願い
します。
担当：村田
電話：03-3503-2729
メール：murata@jnpc.or.jp

第105回ゴルフの会
念願だった黄金の優勝カップ
阿部 正夫(個人D会員)

4月15日(金)、藤沢ゴルフクラ
ブで開催されたゴルフ会、優勝は私
(ネット84㍲写真)、2位は竹内實昭
会員(朝日出身)、3位は小嶋健史
会員(日経出身)だった。



私は定年と
同時にD会員
になった。会
報でゴルフ会
を知り、98回

目のコンペに初めて参加したが、そ
の時に驚いたことがある。それは優
勝カップが黄金色だったことだ。他
のコンペでは見たことがない。いつ
かは手にしたいと闘志を燃やして参
加してきたが今回、ハンディに恵ま
れたことと、同じ組で回ったメンバ
ーのおかげと感謝している。

ところで、終了後の懇談会で個人
D会員にピンバッジを配ってはどの
かと提案した。バッジを付けたマス
コミ出身同士の交流を図り、情報交
換することが大切ではないか。バッ
ジ同士がどこかで出会った時にはク
ラブ会員であることが分かり、情報
の共有もできる。会員数の維持にも
役立つだろう。当日の参加者の皆さ
んも全員賛同した。ぜひ実現してほ
しい。
(共同通信出身)

一日畑を耕す。深いしわが刻まれた白い髪の二人の顔が実にいい。なるほど「ふたりの桃源郷」だ。

ドキュメンタリーの主人公、田中寅夫、フサコさんは戦時中に結婚。終戦で帰還した寅夫さんは山を買って開墾を始める。途中、子育てのため大阪へ出るが、また山に戻り、病に倒れ老人ホームに入居するまで、

試写室

ふたりの桃源郷



「私たちも、いずれ、ああなるのね」。試写会の帰り、エレベーターに乗り合わせた老夫婦が、そうささやいていた。人生いろいろ、夫婦もいろいろではあるが、私も何やらしみじみとした思いにひたっていた。

電気も水道もない山の生活。木を切って薪を作り、湧き水を集めて顔を洗い、風呂をたく。そして日がな

こころは山に 支え合う夫婦、25年間の記録

5月14日（土）から東京・ポレポレ東中野、山口県内ほか全国順次公開
© 山口放送

朝日新聞出身 梶本 章

の歴史を追い続けた山口放送とスタッフの底力に驚いた。四季折々に桃源郷の様子を撮り、ニュースで流したものをまとめた。まさに継続は力と思った。

三人の娘は老いの進む両親を何とか気にかける。引き取ろうとするが、二人は山を離れない。ついに三女夫婦が大阪の寿司屋をたたんで、山の麓の町に引っ越してくる。そしてがんを患った父を93歳で看取り、その5年後、認知症が進んだ母を同じ歳で看取る。

三女の夫が義理の母を山に連れて行ったり顔をなでたり気にかけるシーンは驚いた。なかなかできることではない。実は私にも93歳の母が神戸で一人暮らししている。早々に帰ってみることにした。

そして足かけ25年。夫婦と家族

30年近く、こんな生活を続けてきた。それにしても何で山にこもったのだろう。「郷愁」「老人の自立」「農を中心に据えた生き方」。パンフにはいろいろ書かれていたが、何か違う。言葉に表したらどこか違ってしまふ、そんな「何か」なのだろう。

試写室

オマールの壁



占領に直面する人々のジレンマ

ン）より大きくパレスチナ側に食い込み、場所によってはパレスチナ人の町や村を分断している。高さ8メートル、そびえ立つ頑丈な壁の前に立つと、動かしがたいイスラエル占領の現実が圧倒させられる。

パン職人のオマールは、壁をロープでよじ登っては、壁の向こう側に住む恋人のナディアのもとに通って

パレスチナが置かれた社会状況とそこで暮らす人々のジレンマを巧みに描いている。「壁」とは、イスラエルが「自爆テロを防止するため」と称して、イスラエル領とヨルダン川西岸地区を隔てるように建設した「分離壁」で、総延長は700キロを超える。1949年の休戦協定で定められた境界線（グリーンライン）

いた。ある日、監視中のイスラエル兵士らから屈辱的な扱いを受け、仲間たちと検問所のイスラエル兵士を銃撃し、捕らえられてしまう。イスラエルの秘密警察の激しい拷問を受け、一生収監されるか、イスラエルの「協力者」（スパイ）になるかを迫られる。

実際、イスラエルはこうした「協力者」を大勢つくり、パレスチナ社会に潜入させ、武装組織の指導者らを暗殺したり、逮捕したりしてきた。ひとたび「協力者」のレッテルが貼られたら、二度とパレスチナ社会では生きてゆけない。

私自身、こうした「協力者」の聞き取り取材をした経験があるが、圧迫され揺れ動く心理の描写は、映画の方が生々しくリアルだ。「壁」＝「占領」は、家族や友情、愛までも引き裂き、社会をむしろぶ壊す。

ハニ・アブ・アサド監督はイスラエル国籍を持つパレスチナ人。「この作品の主題は、信頼であり、それがいかに重要で、不安定であるかを描くことだ」と語っているが、ラストシーンに込めたのは、いかなる状況に置かれても屈しない「不屈の精神」だったのかもしれない。

NHK解説委員 出川 展恒
東京・渋谷のアップリンクほか全国順次公開

熊本地震 被災会員社へお見舞い

4月27日開催の理事会冒頭で、伊藤芳明理事長が熊本地震で被災した会員社に対し「厳しい状況のなか報道機関としての使命を全うしている。敬意を表したい」とお見舞いのことを述べた。同圏内の会員社は熊本日新聞社、大分合同新聞社、テレビ熊本、熊本朝日放送、大分放送の5社。

また伊藤理事長は、クラブの活動に積極的に参加し会報の記事も多く執筆した故伊奈久喜・日本経済新聞社特別編集委員に哀悼の意を表した。

情報発信

■パネルディスカッション「混迷のアフガニスタン」を語る

主催：赤十字国際委員会 (ICRC)／協力：国境なき医師団日本

ジャン・ニコラマルティ・ICRCアフガニスタン代表部首席代表、井田覚・国境なき医師団日本元会長が登壇し、アフガニスタンの最新情勢と同国でのICRCの活動などを報告した。司会は土生修一・日本記者クラブ事務局長。(4.8 会場)

■地方紙4社合同記者セミナー

新聞記者をめざす大学生、大学院生を対象としたセミナー。池上彰氏による特別講演「記者になりたい」のほか、主催である河北新報、信濃毎日新聞、中国新聞、高知新聞の記者によるパネル討論と会社説明も行われた。(4.9 10階ホール)

■九州・沖縄県紙8社合同会社説明会



佐賀新聞、長崎新聞、大分合同新聞、熊本日新聞、宮崎日日新聞、南日本新聞、沖縄タイムス、琉球新報がそれぞれデスクを設け、会社案内や若手社員との質疑応答を行った(4.12)。

このほか、新潟日報(4.13)、信濃毎日新聞(4.16)、山陽新聞(4.18)、下野新聞(4.22)、上毛新聞(4.23)の各社も、クラブの会議室を会場に説明会を開いた。

■訪日中国記者団歓迎レセプション

主催：日本新聞協会

日中記者交流計画で来日した中国記者団6人を歓迎する会が開かれた。同計画は日本新聞協会と中華全国新聞工作者協会によるもので、今回で34回を数える。新聞協会国際委員会の立野純二委員長(朝日新聞論説主幹代理)、中国記者団の王亜明団長(河南日報編集長)がそれぞれあいさつし、交流を深めた。(4.20 会場)

■大学の軍事研究に反対する記者会見

昨年、防衛省が大学などを対象に安全保障技術研究推進制度を新設した。この制度に対し、「戦後、学術会議が『軍事研究を行わない』という声明を出し、これまで退けてきた軍学共同を

新しいOB会員

たかお よしひこ
高尾 義彦



1969年毎日新聞入社。編集局次長、役員待遇東京本社副代表兼代表室長、毎日新聞顧問などを経て現在、日本新聞インキ代表取締役社長。

法人登録から個人会員に。気持ちは現役。かたわら、河彦の名でツイッター俳句を発信。佃の自宅から自転車クラブへ、の日々をいずれ。

推し進めるものである」として反対の立場をとる2団体が記者会見を行った。

「軍学共同反対アピール署名の会」の池内了代表(名古屋大名誉教授)、「大学の軍事研究に反対する署名運動」の野田隆三郎代表(岡山大名誉教授)らが登壇し、同制度に応募しないよう呼びかけた。(4.25 会場)

■タイ・フェスティバル2016記者会見

ブンナーク駐日タイ大使が、熊本地震被災者へお見舞いを述べて始まった。4月28日、大使が熊本を訪れ、蒲島知事にタイ政府義援金1千万円を渡す、と表明した。恒例のタイ・フェスティバルは、5月14日・15日、代々木公園で開催される。東京の後、大阪、名古屋、仙台、静岡でも順次開催し、全国規模のイベントになる。(4.26 10階ホール)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる勉強会。衛藤晟一・内閣補佐官(4.6)、浜田靖一・衆院国家基本政策委員長(4.13)、下村博文・自民党総裁特別補佐(4.27)をゲストに招いた。

ニュースパークが「友の会」創設 会員を募集しています

今夏、日刊新聞の発祥地・横浜にあるニュースパーク(日本新聞博物館)がリニューアルオープンします。これを機会に、個人を対象とした「友の会」が創設されることになりました。

友の会は年会費3000円でいつでも入会できます。友の会会員には、無料入館やミュージアムカフェ「カフェドゥラプレス」の割引利用の特典があるほか、「オリジナル新聞手帳」が年末に贈呈されます。

リニューアル後のニュースパークは、新聞文化の発展・継承にとどまらず、現代の情報社会の在り方や、新聞・ジャーナリズムが果たす役割を楽しく学ぶ施設となります。

日本記者クラブの会員の皆さまにもニュースパークを支援していただきたいとのことです。友の会入会を検討くださるようご案内いたします。

入会申し込みは下記のニュースパーク事務局までお願いします。

電話：045-661-2040 FAX：045-661-2029

メール：hakubutsukan@pressnet.or.jp

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 伊勢海老懷石 (7/1まで)

先付：焼き茄子雲丹乗せ、穴子八幡巻ほか お
椀：鮎魚女葛打ち 造り：伊勢海老姿造り 焼物：
鰯木の芽焼き 煮物：伊勢海老具足煮 揚げ物：太
刀魚挟み揚げ 食事：伊勢海老頭味噌椀、ご飯
水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き (5,400円)
(板長：大井由光)

洋食 おすすめコース (6/30まで)

冷製フォアグラのフラン、ヴィシソワーズまた
はコンソメ、オマール海老のカダイフ包みフリッ
ト、トスサラダ、マンゴームース、パン、コーヒ
ー付き (3,780円)。ランチ、ディナー (土曜日はラ
ンチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけ
ます。(シェフ：黒須修一)

受付に新しいスタッフが入りました

4月からラウンジの受付に新スタッフが加わ
りました。月、水、金曜担当の阿部朝恵(あべ・
ともえ)と、火、木曜担当の外立優子(そとだて・
ゆうこ)です。フロアマネジャーをアシストして、
貸室の申し込み手続きや電話応対などを行って
います。よろしくお願いいたします。

<理事交代>

読売新聞社 増田雅己東京本社取締役論説委員
長(旧・小田尚氏)

テレビ東京 吉次弘志報道局長(旧・加増良弘氏)

<法人会員代表変更>

北國新聞社 温井伸代表取締役社長(旧・高澤
基氏)

RKB毎日放送 小林幹雄東京支社長(旧・滝川
雅庸氏)

<訃報>

下記の会員の皆さまが死去されました。謹ん
でご冥福をお祈りいたします。

播谷実会員(読売新聞出身、87歳、3月28日肺
炎のため) 和田正光会員(日本経済新聞・テレ
ビ東京出身、86歳、4月2日虚血性心疾患のため)
伊奈久喜会員(日本経済新聞社特別編集委
員、62歳、同22日胃がんのため) 若宮啓文会
員(朝日新聞出身、68歳、同28日訪問先の北京で)
四方洋会員(毎日新聞出身、80歳、同29日特発
性間質性肺炎のため)



HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

■会見詳録 会見の全文文字記録版

●「木を使い杜との調和めざす」隈研吾・建築家
(2016.2.1)

賛助会員の会費、寄付金控除の対象に

日本記者クラブは2011年、公益社団法人に移
行しました。賛助会員の会費について税制上の
優遇措置を公益認定等委員会に申請し、昨年、
過去5年間の賛助会費リストを提出しました。
今年2月、税額控除の適用要件を満たしている
という内容の総理大臣による「税額控除に係る
証明書」が届きました。

これによりクラブの会費は、賛助会員が個人
であれば確定申告で税額控除を受けることが可
能となりました。また、法人であれば「特定公
益増進法人等に対する寄付金の特別損金算入」
が可能となりました。

手続きの詳細は国税庁のホームページあるい
は税務署でご確認ください。

5月25日に総会記念講演・クラブ賞贈賞式

5月25日(水)午後4時30分から10階ホールで
総会記念講演会を開催します。今年のゲストは
2015年ノーベル生理学・医学賞受賞者で、北里
大学特別栄誉教授の大村智さんです。「私の歩
んできた道」のテーマで語っていただきます。

引き続き5時30分から、日本記者クラブ賞・
同特別賞の贈賞式とパーティーを行います。読
売新聞の尾崎真理子記者と、ジャーナリストの
堀川恵子氏に表彰状と副賞を贈り、受賞の言葉
もいただきます。

会場は10階のレストラン・アラスカで、参加
費は無料です。多数の出席をお待ちしています。
ビジター1人を同伴していただいて構いません。

準備の都合がありますので、出席を希望され
る方は下記にお申し込みください。

メール：kaiken@jnpc.or.jp

FAX：03-3503-7271 電話：03-3503-2722

クラブ賞・特別賞受賞記念講演会は6月7日に

下記のように受賞記念講演会を行います。尾
崎真理子、堀川恵子両氏がそれぞれ執筆の苦労
や取材上のエピソードなどを語ります。質問に
も答えていただく予定です。出席を希望される
方は下記にお申し込みください。ビジター1人
を同伴していただいて構いません。この会合に
は一般の方も参加します。

日 時：6月7日(火)午後6時～8時

会 場：10階ホール

定 員：150人(申し込み先着順)

メール：kaiken@jnpc.or.jp

FAX：03-3503-7271

クラブの電話 ダイヤルイン

●和食レストラン(9階)..... ☎3503-2723	●会員事務..... ☎3503-2727
●洋食レストラン(10階)..... ☎3503-2766	●経 理..... ☎3503-2728
●貸室予約、宴会打ち合わせ..... ☎3503-2724	●クラブ行事への申し込み..... ☎3503-2722
●受 付..... ☎3503-2721	●会見申し込みアドレス..... kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

●法人会員：133社	●基本会員：743人	●個人会員：1,310人
●法人・個人賛助会員：64社・141人	●特別賛助会員：99人	
●名誉・功労会員：12人	●学生会員：129人	計：197社・2,434人

会報委員会

委員長＝飯塚 浩彦
委 員＝稲沢 裕子 井上 洋一 大寺 廣幸
鈴木 仁 高橋 茂 長崎 和夫
藤井 良広 藤澤 秀敏 吉澤 正一
渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：野村 ^{のむら} 和宏 ^{かずひろ} (中日新聞写真部)



雨が降る中、余震が続くために避難所の外で過ごす住民たち = 4月16日 熊本県益城町

生活小国の大震災列島

東北の次は九州——。熊本地震は、日本がいまや大震災列島であることを見せつけた。続く余震で避難所の中にもいられず、雨の中、外で過ごす住民たちの姿は、日本中のだれもが、いつ家を失ってもおかしくない私たちのいまを痛感させる。

だが、そんな「足元が崩れる大変化」に対応した備えを、私たちの社会はどれだけ整えてきただろうか。今回の震災では、倒壊の危険から本庁舎が使えない自治体が熊本県内で5自治体にも及ぶことが明らかになった。災害対策の司令塔のはずの建物の耐震化が、財源不足で遅れていた。

東日本大震災では、財源不足で自治体公務員がギリギリまで減らされていたことが、復興を遅らせた。宮城・南三陸は街全体が津波で流され、住民の多くがなお仮設住宅から出ていない。昨夏、訪れた時、「オリンピックは私たちがまともな家に住んでからにしてほしかった」と、高齢女性がつぶやいた。生活現場への支えが衰えていることが、震災の傷を深める。だが、そうした教訓は生かされてこなかった。福島原発の爆発原因は解明されないうまま、原発も各地で再稼働の申請が続く。今回の地震を招いた活断層の位置さえはっきりしない中、「原発」はいまやドキドキのタネとなった。目立つのは、沖縄で議論を呼んだオスプレイや自衛隊員の活躍ばかり。末端の声が必要な時に、首相に権限を集める緊急事態条項が提案される。

オリンピックや軍備増強の前に、「生活小国の大震災列島」を乗り越える政策を。避難所の外で夜を過ごす住民たちの姿は、そう語りかけているようだ。

(竹信三恵子)